名古屋大学人文学研究 第40号　2011年3月　正誤表

本誌の編集過程で校正ミスが発生いたしましたので、下記の通り正誤表を添付いたします。

◇　杉淵洋一「有島武郎＜草の葉会＞と鶴見祐輔＜火曜会＞　－新渡戸稲造の人材育成教育の延長として－」

33頁

当該する頁に挿入した、１９１６年に第３３回アメリカ合衆国大統領選挙結果のグラフが文字、グラデーション等が上手く出力されていないので、以下に結果を再記する。総選挙人数は、５３１人。民主党（現職大統領・ウィルソン）が、過半数の２７７人（５２％）を獲得し、民主党（ヒューズ）は残りの２５４人（４８％）を獲得した。一般投票者総数は、１８５２８７４３人で、投票の内訳は、民主党へ９１２９６０６票（４９％）、共和党に８５３８２２１票（４６％）、その他が８６０９１６票（５％）であった。

本文でも触れたが、カリフォルニア州の選挙人１３人を共和党が獲得していたならば、獲得選挙人数２６７人となり、２６４人の民主党を上回り、共和党の大統領候補・ヒューズが第２９代アメリカ合衆国大統領に選出されていた。

34頁

41～43行目：

加藤シヅエ最晩年の回想によると、「最初の夫・石本は、理想家で、新渡戸稲造先生のお弟子でもありました。（中略）お見合いといっても、私の両親の知り合いが、石本の家とお隣同士だったので紹介してくださったのです。新渡戸先生のお弟子ならば間違いないというわけで、双方で二つ返事の様な形で話がすすみました。」（「「一生の仕事」と出会う」『百歳の幸福論』大和書房１９９６，pp. 137-139.）とある。当該頁４５行目にあるように、加藤は鶴見祐輔の姪に当たる。これ等のことは、新渡戸家と鶴見（後藤）家がこの時期に、急速に血縁的な関係を深めていったことを判断する一つの証左と言えよう。

35頁

12行目：

第一高等学校校長就任の前、１９０３年１０月に、新渡戸が植民政策の教授として京都大学法科大学に赴任したのは、鶴見の岳父・後藤新平が、当時の学長であった織田萬に新渡戸を強く推挙していたためであった。１９００年に植民地下の台湾において民政長官であった後藤が、当地の製糖政策に関して、新渡戸を破格の待遇で役人として技師に登用して以来、後藤と新渡戸の二人は一蓮托生ともいえるような関係で結ばれていた。

38頁

31～32行目：

１８９２年1月、アメリカ人の妻・メリー・エルキントンとの間に生まれた長男・遠益の出産直後の夭折が大きな要因となり、妻は病床に伏すようになった。これ等の事象は、新渡戸に生活の負担を与える結果となった。松隈俊子氏は、新渡戸についての評伝の中で、「日頃の無理がこうじて、はじめは神経痛で黒板に字が書けないような状態から次第に神経衰弱気味になり、病床に親しむことが多くなった。ついに明治三十年（一八九七）十月二日、ドクトル・ベルツの勧めで、彼は札幌農学校の職を退き、徹底的に養生するため、まず伊香保に転地療養することになった。」（「札幌農学校教授時代」『新渡戸稲造』みすず書房１９６９，p. 180.）と指摘している。

※著者は本稿を校正する機会に恵まれぬまま、本論集が編集委員の判断によって刊行されてしまったため、十全な文章チェック、並びに推敲を行う事が出来ず、本稿中には、同一の文章表現の多用や読みづらい箇所等が散見しているものと思われるが、事情に鑑みて、その点を曲げて御寛恕していただければ幸甚である。（杉淵洋一）

◇　水川敬章「澁澤龍彦の作家像と読書行為に関する試論――『唐草物語』における」

45 頁

8 行目：×例えば、安西は『唐草物語』⇒　○例えば、安西は「『唐草物語』

18 行目：×本稿では、⇒ ○本稿は、

46 頁

33 行目：×エッセイに取つて⇒○エツセイに取つて

36 行目：×自我を拡大して拡張して⇒○自我を拡大し拡張して

47 頁

2 行目：×作家とのテクストとの直結した関係をエッセイあるいは随筆観は

⇒○作家とのテクストとの直結したエッセイあるいは随筆観は

6～7 行目：×といふことだが、（略）ではなぜいつそ思ひ切つて私小説や身辺小説に止まらず随筆にまで行つては

⇒○ということだが、（略）ではなぜいっそ思い切って私小説や身辺小説に止まらず随筆にまで行っては

25 行目：×要するに作者の　⇒　○要するに、作者の

48 頁

8 行目：×『唐草物語』とは、⇒ ○『唐草物語』は、

50 頁

1 行目：×講堂消費社会　⇒　○高度消費社会

5 行目：×六〇年代はサングラス。⇒○六〇年代はサングラス、

51 頁

16 行目：×「あれは誰が見たつて澁澤龍彦だって　⇒　○「あれは誰が見たつて澁澤龍彦だつて

52 頁

26 行目：×写真対し　⇒　○写真に対し

53 頁

15 行目：×「私」とは確かに典籍の　⇒ ○「私」とは典籍の

18 行目：×仕掛けがあることが理解される。　⇒ ○仕掛けがあることに気付かされる。

54～55 頁 註

19：×戸坂潤「エツセイと評論」（『戸坂潤全集』勁草書房、1966、p. 28）。

⇒○戸坂潤「エツセイと評論」（『戸坂潤全集』第 4 巻、勁草書房、1966、p. 28）。

16：×竹友藻風『竹友藻風選集 エッセイとエッセイスト』（高桐書院、1947）

⇒○竹友藻風「第 1 部 エッセイの概念」（『竹友藻風選集 エッセイとエッセイスト』高桐書院、1947）

20：×長谷川泉『随筆読解の理論』（明治書院、1964、p. 78）。

⇒ ○長谷川泉『随筆読解の理論』（明治書院、1964、p. 78）。長谷川は、厨川、前掲の議論を踏まえている。

25：×内藤三津子「「血と薔薇」の頃①」（『澁澤龍彦全集月報 18』、河出書房新社、1994、p. 2）。

⇒○内藤三津子「「血と薔薇」の頃①」（『澁澤龍彦全集月報 18』、河出書房新社、1994、pp. 2-3）。

28：×浅羽、前掲、p. 311。⇒ ○浅羽通明『澁澤龍彦の時代 幼年皇帝と昭和の精神史』（青弓社、1993、p. 311）

38：×ジョナサン・クレーリー『観察者の系譜 視覚空間の変容とモダニティ』（遠藤知巳訳、以文社、pp. 31-32）

⇒○ジョナサン・クレーリー『観察者の系譜 視覚空間の変容とモダニティ』（遠藤知巳訳、以文社、2005、pp. 31-32）

◇松尾譲児「新出『因縁集』―資料紹介―」

1頁
14行目：（誤）なおかつ→（正）なおかつ伝本中では
2頁
4行目：（誤）推定される→（正）推定される、
6行目：（誤）推定される→（正）推定される、
10行目：（誤）古書店で→（正）古書店にて
16行目：（誤）補修作業に→（正）補修作業を
18行目：（誤）『因縁集』装丁は→（正）『因縁集』の装丁は、
3頁
2行目：（誤）上下１．０cm→（正）一．〇cm　／　（誤）左右１．５cm→（正）左右一．五cm
14行目：（誤）『因縁集』は→（正）『因縁集』は、
17行目：（誤）合計百１５４条→（正）合計１５４条
21行目：（誤）数部を合冊→（正）数部の合冊
4頁
5行目：（誤）十七話→（正）１７条
7行目：（誤）１７話→（正）１７条　／　（誤）１６話→（正）１６条
8行目：（誤）８話→（正）８条　／　（誤）１０話→（正）１０条
13行目：（誤）二十七条→（正）２７条
16行目：（誤）三条→（正）３条
24行目：（誤）二十七条→（正）２７条
9頁
5行目：（誤）用いられている→（正）用いられていることも
11行目：（誤）単独の文献→（正）単一の文献
17行目：（誤）１７話→（正）１７条
10頁
3行目：（誤）８巻→（正）八巻
6行目：（誤）３話→（正）３条　／　（誤）３５７話→（正）３５７条
20行目：（誤）９２話→（正）９２条
11頁
10行目：（誤）得られた知見を→（正）得られた知見の
12頁
14行目：（誤）一致する→（正）一致する、
20行目：（誤）巻１１→（正）巻十一
13頁
11行目：（誤）後編を→（正）後編は
20行目：（誤）解明も→（正）解明